

赤木三郎会員のご逝去を悼む

秋山雅彦*



2014年1月3日ご自宅にて、長女の里香子氏撮影

鳥取大学名誉教授赤木三郎氏は、2014年2月5日、82歳の誕生日を迎えられた2日後に、家族の皆さんに見守られて冥界へ旅立たれてしまいました。赤木氏は化石研究会創設時からの会員で、1993年度と1994年度の2年間にわたって本会の会長を務められました。また、1995年6月に鳥取大学医学部（米子市）で開催された第13回総会では「鳥取砂丘の形成とクロスナ」と題する会長講演を行っています。

2009年6月に開催された本会50周年記念の第27回総会では、永年にわたる貢献にたいして表彰状が授与されました。本会HPの「化石研究会とその歴史」には第一回例会の写真と50周年記念総会の写真が掲載されています。前者の写真では後列、後者では前列の、ともに左から2番目に彼の姿があります。会員の皆様には是非ともHPを開いて、赤木氏の映像をご覧になり彼の冥福を祈って下さるようお願いいたします。

赤木氏は1952年東京教育大学理学部地質学鉱物学科に入学、学部・大学院と一貫して藤本治義教授の指導のもとで、古生代化石の古生物学的研究を続けられました。その研究成果の一部は“Lower

Permian Arthropods from the Taishaku Limestone, Southwest Japan”として、鳥取大学紀要に掲載されています。この帝釈石灰岩の産地の帝釈峡は比婆道後帝釈国定公園の主要景勝地で、赤木氏はこの景勝地のある広島県比婆郡東城町（現在の庄原市東城町）のご出身です。

大学院卒業後の1961年11月には鳥取大学芸学部地学教室に講師として着任されました。着任後は、山陰地域の第四紀地質に関する研究に取り組むとともに、鳥取県の中新世の植物化石・耳石、広島県観音堂洞窟の陸貝などの研究などを行ってこられました。鳥取大学では教育学部地学教室の教授として、多くの学生指導とともに鳥取地学会の発展にも大きく貢献されました。それらの功績に関しては星見清晴氏による追悼文（地団研の「そくほう」699号, 7p.）で詳細に語られています。大学の図書館長や教育学部長を務められ、大学行政への貢献も大きかったと聞いています。退職後は放送大学鳥取地域学習センターのセンター長として地域の教育に貢献されました。また、広島県東城町の町史の編纂、山陰海岸世界ジオパーク認定に向けての実地調査、鳥取砂丘検定試験の実施委員長としての活躍など、地域への貢献は高く評価されています。

赤木氏は専門の地質学の研究にとどまることなく、考古学・文化人類学などの分野でも幅広い活躍を果たしてこられました。細川流盆石 九曜会に寄稿した「白砂のなぞ」（2002）、古事記の「因幡の白兔」神話のなかの真実を読み解く研究（2012）、「弥生の博物館」とも称される鳥取県の青谷上寺地（あやかみじち）遺跡の研究（2013）などは、赤木氏の博学多才の真骨頂が発揮された労作でしょう。今後の学際的研究への期待が大きかっただけに彼の逝去は無念でなりません。伊能忠敬と石井世左衛門（2011 放送大学鳥取学習センター）、鳥取県のジオロジーことはじめ（2011 鳥取県立博物館）、隠岐から渡来した石材（2012 県民ふれあい会館）などの講演用スライドが残されていますが、論文としては未公表のままであり残念でなりません。

赤木氏の墓は鳥取市戎町の一行寺にあります。墓石

* 本研究会会員 〒005-0040 札幌市南区藻岩下4-5-5
mhakiyama@nifty.com

の安山岩は八東川流域産，石碑は千代川上流の用瀬（もちがせ）産の花崗岩で，それらはともに彼の研究対象でもあった鳥取砂丘の砂の源岩とのことです。この墓は彼の教え子や同僚の皆さんの多大な協力によることで，多くの人たちに慕われ支えられた彼の人徳によるものである，と痛感させられます。

本来ならば，すぐにでも赤木氏の功績を回顧して追

悼文を書くべきところ，大学入学以来60年を越す長い交友を続けてきたために，個人的思いが強すぎるとして追悼文を書くことをためらっていました。彼の一周忌が終わったというこの時期になって，やっと書く決心ができました。遅くなった追悼をお詫びするとともに，ご冥福を心からお祈り申し上げます。合掌